

諂偽を越えて

人間の体は食物によつて養われて生きています。したがつて食事がとれなくなつた時は、死ぬる時であります。

食物を摂り水を飲めば、必ず便通があります。糞尿には、毒素があります。便秘すればその中毒によつて頭をおかされ、脳溢血や短命の因となると言われます。更に、盲腸炎等によつて腸が麻痺して、運動がなくなり、便通が全くなければ必ず死に至ります。

体のどこでも悪くなつて大患に至れば胃腸も食を受つげず、食事が摂れなくなれば死ぬるより外あり得ません。

心の世界もまたかくの如くであります。

お浄土の菩薩は「禅三昧為食」とて、尊いみ法を心の食とすると説かれてあります。念仏の子もまたみ法を心の食とします。一度、念仏の心が、み法の食を知りはじめると、久遠劫来の胃癌も治りはじめて、日々に少しづつよくなつて、いよいよみ法の食の味を増して来ます。かくして仏法を愛樂するものは、信力を増長して来ます。

み法の味のほんとうにわからぬ人は、必ず、食つてはならぬ毒を食います。そして人にも毒をすすめます。貪欲、瞋恚、愚痴を三毒と言われるのがそれであります。智慧のない凡夫は、毒を毒とも思いません。であるから、毒を平気で食うのであります。

『末燈抄』の中に、聖人は

「もとは無明の酒に酔ひて貪欲、瞋恚、愚痴の三毒をのみ嗜み召しあうて候ひつるに、佛の誓を聞きはじめしより、無明の酔もよう少しづつさめ、三毒をも少しづつ好まずして、阿彌陀の薬を常にこのみ召す身となりて在しましあうて候ふぞかし。しかるになほ酔ひもさめやらぬに重ねて酔を勧め、毒も消えやらぬになほ毒を勧められ候ふらんこそあさましく候へ。」

とて、更に「薬あり毒を好め」という道理はないことを、こまごまと教えられています。

瞋恚は苦しく胸をさすが故に、身心をすり減らす恐ろしい毒とわかりますが、貪欲の満足が、罪悪煩惱であることを知ることには困難であります。貪欲の満足を与えてくれる人は善人に見え、貪欲の満足によつてニコニコしている自分も善人に見える、それだけでは、もののほんとうの相は見えて来ませぬ。貪欲の水の河が、水の河と見えるのには、如来廻向の信心の智慧が光つて下さらねばなりません。貪欲の水の河が、おそろべきものと見えて来なければ、瞋恚の火の河も恐るべきものとは見えないで、他人のみが悪く見えるばかりであります。白道に立たされた時、水火二河の真相がほのかに見えて来ます。

人は幾度も、大法か名利か、そのどちらをか選びとらねばならぬはめに立ちます。いざとなれば大法よりも名利を取り、愛欲をとり道をすてて世の雑音にひきまわされるもの、そこには、自己のほんとうの相を見、如来のほんとうのみ声を聞いて歩もうとする衷心の願いは失われています。名利を食う心では、み法は食われません。

聖人は信巻に、至心釈にも、信樂釈にも、「虚仮、諂偽」という言葉を出していられます。智慧光に照破せられた自証の世界に、見出されて来る衆生の相であります。「そらごとたわごと」であり、偽りへつらふことであります。その中で、この諂という文字「へつらう」という字が、近頃じつと私の心中に現われて去りません。へつらうということは、いつわることでありますから、諂偽と言われるのであります。衆生は、どれほどへつらつてもらうことが好きであるか。したがって人にへつらつて好かれようとするか。それが生れてから身にしみて、遂には「虚仮雑毒」と、おそるべき毒であることさえわからなくなるのであります。

美しい菊の花が香っております。自ら美しく咲き、清く香っているだけで、他を招かず、来るを拒まず、尊貴の前にも色を変えず、富貴の前にも香を増さず、貧賤の前にも減ぜず、わびしき垣根に独り輝いております。

婦女子は……否、多くの人間は、同じ道理でも、笑いながら、言葉柔らかに聞かざれば、少しもその心に響かず、声を励まし、色にあらわして言われると、響くようであります。おとなしく言われた分では笑って受けず、厳しく言われると泣いて悲しむ。法の受け取られないことは同一であります。「諂」と言う字の恐るべきを思いません。

たとえ、やさしき微音で言われるとも、正しい大法が耳に入る時、天地も動くほどに感ぜられる時、み法はその人のものであります。

人はたとえへつらわれることを好かうとも、人にへつらつてはならない。へつらわれることを喜んでほならない。清浄なる如来本願が同一に生きますことによつて、煩惱の手と手を取らざるに結ばれ、手を離して所有せざるに自然に一如一体となる世界、それが同一念仏の世界である。聖人の「御同朋、御同行」の世界がそこにある。御同朋御同行の世界では、ただ大法のみがものを言いたもうのであります。

たとえ、人間的な温かき、煩惱と煩惱との親切が、ものを言わない為に、百千の人を悉く失うとも、あえて悲しむに足らず、念仏の花と花、垣根の黄菊白菊の共に香る風情より、有り難く尊きものはありません。

されば、寺院にして門徒の奪いあいをし、教家にして、同行を自分の手に縛り所有せんとするが如きは、念仏門の根本義を覆すものであります。もし、酒飯茶等の饗応によつて、人を繋がんとするが如きは、「諂偽」の心相を凝観せず、仏智の光耀なき流韓の虚偽相であります。自他共に助かりません。

『末燈抄』や、『御消息集』は、聖人の御弟子に送られたお手紙等を集められたものであります。それを拝読しますと、その最初から、

「一。何事よりは如来の御本願の弘まらせ給ひて候ふ事かへすがえすめでたくうれしく候。」

とみ法のこと書き出されてあります。時候の挨拶もなく、美辞麗句もなく、念の入った分で「六月一日の御文くはしく見候ひぬ」とか「一、護念坊の便に教忍御坊より錢二百文御志の物賜りて候。」とある位で、直ちに法門のことが説かれてあります。

お互いの音信が如何に、美しくして粗末なものであるか、無意味なものであるか、諂いの多いものであるか、お恥しいことであります。

美しい文句はなく、諂いもないかわりに、一字一句如来のみ心に根ざしたものであります。故に、一本の御消息すら、直ちに御聖教であり、聖典であります。一人の御弟子が賜ったものでなくして万人が賜ったものであります。七百年の昔がそのまま、今日の私にくださったものであります。

あまりに手紙の書き方の多い人は、この意を受け取って考うべきであります。聖人のお手紙を、私が頂いたものとして、喜べるか否か。

胃が悪いのに甘いものを好く、ますます胃を悪くします。久遠劫来の胃病でありつつ、諂偽の甘いものを求めて、サツカリンの如く甘くして毒なるものを食う、三悪の病が重くなるのは当然であります。

如来真実の正法の食物は喉を通らず、三毒の汚物は内に通ぜず、やむなく、三毒を外に嘔吐して隣人に家内にあびせて人を苦しめるもの凡夫であります。そうした重患の間にも、浅薄な賞讃や、へつらいのサツカリンは遠慮なく食って歩き、正しい忠告も教も胃の腑に入らない。長男のすることが気に入らねば、次男、三男に移してまわり、第三の嫁が機嫌をとりへつらわねば、第一、第二の嫁に悪口してまわる老婆、その三毒の嘔吐に傷ついて、次男は長男を悪み、長女は次女を敵とする。やがて、それは悉く老婆の上に帰って、いよいよ瞋恚の炎に身を焼いて、病を重らすのであります。

正法の言々句々よりも、賞讃や非難の聲が、強く耳を打つ人の子は、皆久遠劫来の、虚偽諂偽の重患と思ふべきであります。

念仏一つで、何もかもすむ人。

如来聖人のみ教が、久遠劫来の自力我慢の胃癌の手術をして下さって、三毒の劇毒が内に流れて「念を難思の法海に流す」と、お浄土に通じ、信心の水道を通して、真如一実の功德宝水の清浄によつて心を洗われるに至って、病は不退転に癒されて来るのであります。病の少しづつ治るものには、よし病苦は去らなくとも、限りなき歡喜があります。

虚仮諂偽ならざる正法の食物が少しづつ頂けるようになり、やがてその尊い味がわかって来る時、諂偽の毒を厭うてくるに至るのであります。いつまでも、正法と三毒の見分けがつかず、み法を聞いているようでも、悪魔の声も、み法と同一に、あるいはより有り難く聞こえるのは、まだまだ信心の智慧が、はつつきりしたいないが故であります。

蓮如上人が、

「一。同行善知識にはよくよく近くべし。『親近せざるは雑修の失なり』と、禮讚にあらはせり。悪しき者に近づけばそれには馴れじと思へども悪事よりよりにあり、たゞ仏法者には馴れ近くべき由仰せられ候。俗典にいはいはく『人の善悪は近づき習ふによる』と。また『その人を知らんと思はゞ、その友を見よ』といへり。『善人の敵とはなるとも悪人を友とすることなかれ』といふ事あり。」（御一代聞書）
諂偽を超えて正法を食とし、念仏一つですむ人になりたいものであります。